

OTANIing

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

高校学園祭垂れ幕コンテスト



澄み渡れ大谷

学校長 飯山 等

この2学期も始業式をマイク放送で行いました。移動の時間の節約が第一の理由ではありません。感染がより身近なものとなった状況の中で、集い合っ

て学ぶ場であり続けたいとの思いゆえでした。ここ数年その「あり続ける」ために、私達一人ひとりのふるまいが大切なことになってきています。みんなが「あり続けたい」と強く思い、その心を基本としてわが身のふるまいを考える。私一人の思いがそれほど問われなくても、「あり続ける」ことが成り立っていた、成り立つと感じられたときもあったでしょう。しかし今は、私たち一人ひとりが強く思うこと、そしてその思いを形にすることが肝要な時に身を置いています。

蓮如上人は「講」という形を大切にされました。それはある場面の形式ということではなく、人が存在する、そのあり方の基本としての了解でした。「講」という字は、「発言して心を通じ合わせるの意味」を表します。キャッチボールとドッジボールという2つのあり方に例えれば、われわれはしばしば互いの関係をドッジボール化してしまいます。そのせいで、その場の湛えている豊かさと和らかさに出会い損ねてしまうのです。上人はキャッチボールの意味深さ、互いに受けとめ合うことの大切さに心を置いて教えてくださいました。歴史を遡れば、聖徳太子は、戦いと憎悪が支配する巷間の現実を痛んで、安養なる心に満たされた和合を根基とする国を成立せしめんと十七条の憲法を定められました。そしてその初めを、「一つに曰わく、和らかなるをもって貴しとし、忤うること無きを宗とせよ。人皆党有り。また達る者少なし」(『十七条憲法』)と示されました。「和」の対義語は「忤=そむく」、**「和」は、「人の声と声**が調和する」の意味です。聖徳太子の「和」のころ、蓮如上人の「講」の精神は、学校が集い合う学び舎として「あり続ける」、存在することの意義を教えてくださいましたように思います

現在の世界的な感染症の流行は、われわれの「個」が脆弱なものでしかなく、もろく「孤」に転化してしまうことを露呈させました。大地に深く根ざすことによって確かに繋がり合う、信頼と安心に満たされた「個」ではなく、多くを遮断することによって、かろうじて動揺を免れている、きわめて不安定で覚束ない、もろくて壊

れやすい、おそれに身を固くしておどおどする「孤」でしかなかったことを。そのような「孤」が作る世間は、分断と排除に満ちたものにならざるを得ません。聖徳太子は先の憲法の第十条に「十に曰わく、忿を絶ち瞋を棄てて、人の違うことを怒らざれ。人皆心有り。心おのおの執れること有り。彼是すれば我は非ず。我是すれば彼は非ず。我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫ならくのみ」と共に生き合う心根を示されました。

例年のように2学期に入って高3生に対して進学推薦のための模擬面接をしていて、この学年は中学の卒業も高校への入学も、極めて変則的な形で経験した学年であることをあらためて知らされました。全国に非常事態宣言が発出されて、学校が行ってはいけな

いところになり、2ヶ月に及ぶ自宅待機を強いられ、それからの3年間はさまざまなことが、日常の授業も、クラブの活動も学校行事も、縮小、制限、中止されることが日常となりました。上に触れた模擬面接のとき、少なくない生徒が「私たちはマスクをしてこの学校に入学して、マスクをしたまま学校生活を送り、よほど親しいひとでない限り、顔を知らないまま卒業していきます」と言ったその言葉は、私にはその奥にあるさびしさをひしひしと感じさせるものとなりました。

一方で私の心配を老いの感傷と粉碎してくれるようなパワーで、昨年10月には高校生徒会がOSF(Otani Sports Festival)を、中止となった学園祭と体育大会を併せ持つような取り組みとして企画し実行してくれました。さらに今年6月には、そのOSFを継承・発展させようと、中学と高校の生徒会が協働してO-CAST(Otani Culture and Athletics Students Tournament)の実行に至るとい